

内水面漁場環境モニタリング調査結果（1）

水産研究所では、平成27年度から「内水面漁場環境モニタリング調査」を実施しています。今回は、28年度に県中央部の旭川で行った調査の一部を紹介します。

28年度は、内水面で重要なアユに的を絞って、その漁場環境について調査しました。調査場所は、旭川中央漁協管内のアユ漁場で、現在でもアユが良く釣れる漁場（良好漁場）と以前は良く釣れたが近年釣れなくなった漁場（不良漁場）の2カ所としました。主な調査内容は、アユの餌となる付着藻類の種類や現存量、生息場である河川の形状やアユの成長などについて、良好漁場と不良漁場で何が異なっているのかを調べました。

まず、両者の餌環境を比較すると、餌となる付着藻類の量や質にほとんど差はみられませんでした。

（図1、2）

次に河川の形態について、それぞれの漁場の代表的な場所の河床材料の組成と川幅、水深および流速を測定しました。その結果、良好漁場の河床材料の組成は、不良漁場に比べ巨石以上（長径25cm以上）の割合が多いことが分かりました。（図3）

また、川の横断面の状態は、良好漁場では川底が複雑で、流速の速い所や遅い所があるのに対し、不良漁場では、川底は平坦で流速も同様であることが分かりました。（図4）

その他、それぞれの漁場で釣れたアユの成長や肥満度なども定期的に調べましたが、不良漁場の魚の方が大きく成長し、肥満度も良好という結果が得られました。

今回の結果は、調査にご協力いただいた地元漁業協同組合の理事会で説明し、今後、河川工事を行う機会に、河床材料の組成や流況に変化を付けるなど

の提案をしました。

（内水面研究室 杉野）

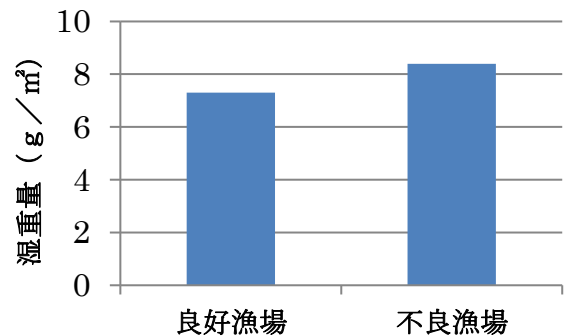


図1 付着藻類の現存量

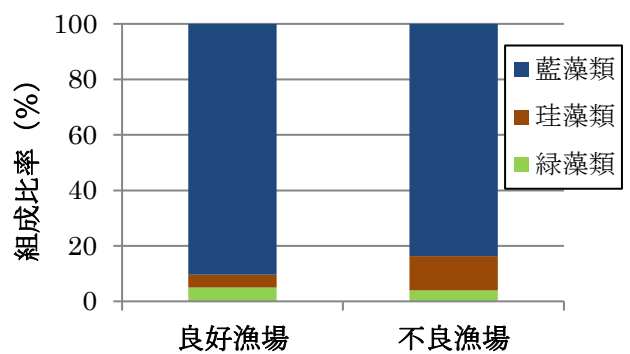
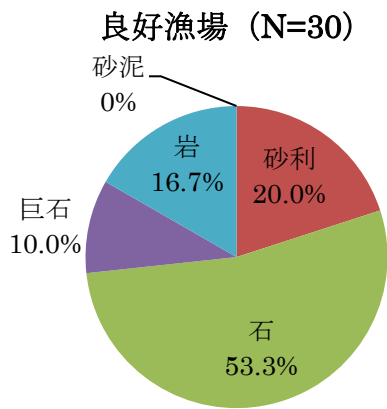
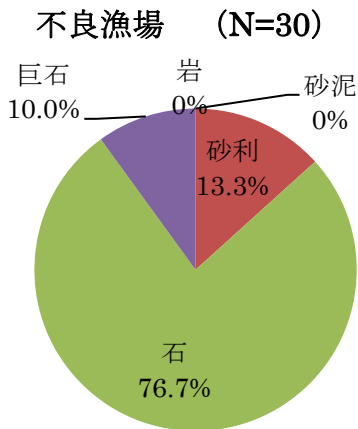


図2 付着藻類の組成

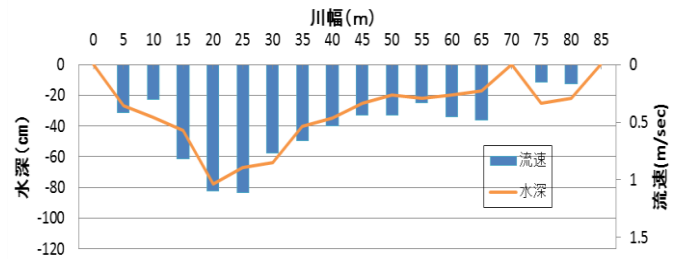


巨石と岩の割合は26.7%

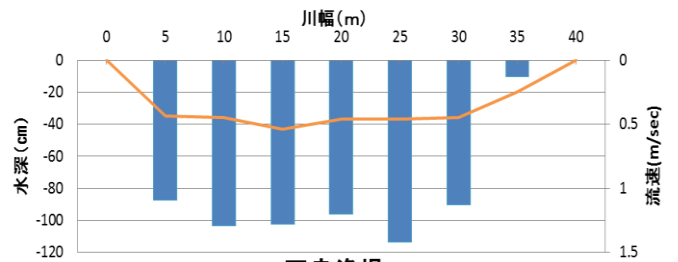


巨石と岩の割合は10.0%

図3 両漁場の河床材料組成



良好漁場



不良漁場

図4 両漁場の横断面と水深・流速